

イエスがある町におられたとき、そこに、全身既定の病を患っている人がいた。イエスを見てひれ伏し、「主よ、お望みならば、私を清くすることがおできになります」と願った。イエスが手を差し伸べてその人に触れ、「私は望む。清くなれ」と言われると、たちまち既定の病は去った。イエスは彼に厳しくお命じになった。「誰にも話してはいけない。ただ、行って祭司に体を見せ、モーセが定めたとおりに清めの献げ物をし、人々に証明しなさい。」（ルカ福音書5：12～14）

「イエスがある町におられたとき、そこに、全身既定の病を患っている人がいた」と書き出している。「既定の病」とは何か。新共同訳は「重い皮膚病」、口語訳は「らい病」、岩波訳も「らい病」と訳している。原語のギリシア語は「レプラス」で「らい病」である。「らい病」は不快用語とされ、「ハンセン病」と言うようになった。5章に登場している病者は、現代で言うハンセン病患者ではない。そこで「重い皮膚病」と訳したのであるが、聖書協会共同訳は「既定の病」と訳し変えている。「既定の病」については、レビ記13章に詳しく説明されている。皮膚に腫れ、吹き出物、斑点がある場合は、祭司に見せ、患部の毛が白く変わり、皮膚の下まで及んでいるなら、「既定の病」である。そして、「既定の病を発症した人は衣服を裂き、髪を垂らさなければならない。また口ひげを覆って『汚れている。汚れている』と叫ばなければならない。その患部があるかぎり、その人は汚れている。宿営の外で、独り離れて住まなければならない」と規定されている。5章の「既定の病」を患っている人はハンセン病患者ではないが、過去にハンセン病患者が扱われたと同じ偏見と差別を受け、排除され、孤独の中で生きていた人である。だから、「既定の病」では意味が分からず、「らい病」と訳した方がよいという主張はある。

既定の病を患った人が、主イエスを見て、近づいてひれ伏し、「主よ、お望みならば、私を清くすることができます」と、癒しを願った。これは、律法違反である。彼は「私は汚れた者です」と言いながら、主イエスの前から身を引かなければならない。しかし、彼は病の苦しみと共同体から捨てられた孤独の悲しみに耐えられず、律法を犯してまでして、癒しを懇願したのである。彼の苦悩の深さが分かる。すると、主イエスは手を指し伸べて彼の体に触れた。人は皆、彼を見かけると逃げ去るか、石を投げつけるかであったが、主イエスは、皮膚病で全身傷ついた体に触れられた。この行為だけで、彼はどれほど嬉しく、慰められたであろうか。主イエスは「私は望む。清くなれ」と宣言された。彼は「お望みならば」と控えめな言葉を発しているが、主イエスは、その言葉を受けて、「私は望む」と応じている。そして、「清くなれ」と命じられた。命じると、既定の病は去った。

主イエスは彼に、他言しないように厳しく命じられた。また、祭司に体を見せて、モーセが定めた清めの献げ物をし、人々に清められたことを証明しなさいと言われた。宿営の外で暮らす生活から、共同体へ復帰できる人間に回復したのである。彼の喜びはどれほどのものであったか。既定の病を癒された主イエスの評判は広まり、大勢の群衆が押し寄せて来た。主イエスは、群衆を逃れ、寂しい所に退いて、一人で祈っておられた。

著者ルカは、主イエスは既定の病を清める力を持つ神の子であると証言している。人は皆、他人に言えない傷を負っているが、その傷に主イエスは手を触れ、傷を清め、癒してください。その恵みを信じるから、立ち上がって、自分の人生を生きられるのである。